



## 彙報

10月5日の総会における決定事項及び諸報告は次の通り。

### 【議決事項】

- (1) 平成12年度決算及び平成13年度予算案が承認されました。
- (2) 平成13年度事業計画が承認されました。
- (3) 次年度の大会開催校は、東北大学(平成14年10月12・13日)に決定しました。

### ◎会費納入について

会費未納の方には振替用紙を同封いたしますので、至急ご送金願います。なお、数年にわたった未納の方は特にご注意願います。4年にわたって滞納されますと、除名となります。(郵便振替口座：00160-9-89927)

### ◎「学会報」送付停止について

平成12年度会費未納の方には「学会報」を送付いたしません。会費納入が確認され次第、送付いたします。また、納入の際には、振替用紙通信欄に未送付の「学会報」号数をご記入下さい。

### ◎住所変更について

住所・所属機関等の変更は亟やかにご通知下さい。通知は書面もしくはFAXにてお願いいたします。電話及び会費振替用紙でのお届けはご遠慮下さい。

# 私の日本中国学会初体験

理事長 興膳 宏

私をはじめて日本中国学会の年次大会に参加したのは、一九六四年（昭和三九年）に慶応義塾大学で開かれた第十六回大会である。当時、私は京都大学大学院の博士課程二年次に在学中だった。主任教授だった吉川幸次郎先生から、「君たちも、そろそろ大学の外で自分の研究成果を発表する機会をもつべきではないか」という助言があって、その気になったと記憶する。同級生だった中鉢雅量・西村富美子両氏といっしょに学会に入会し、その年の大会で三人そろって研究発表を行なった。

この一文を書くために記録を調べてみると、「大会は、十二月五・六日の両日に亘って、慶応義塾大学を会場に開催された。秋のオリンピック東京大会のためその開催を繰下げたが、参加者約三百名を数え、三田山上を賑わす盛会であった」（『日本中国学会報』第十七集彙報）とある。『日本中国学会五十年史』によれば、この年の会員数は六百八十七人だったとあるから、その半数近い三百人が参加したとあれば、文字通りの「盛会」といってよい。意外だったのは、十二月初旬という例外的に遅い時期に開かれていたことである。

遅い開催時期となった理由は、「彙報」に記されるように、その年の十月十日から二十四日まで開催された東京オリンピックのためである。今まですっかり忘れていたが、そういえばあの女子バレーボール決勝戦のテレビ放送を、どこかで興奮しながら見ていた記憶がある。それにしても、十二月に開催された大会というのは、学会五十年の歴史の中でもこのときだけである。なるほどオリンピックとはすごいものだと、妙なところで改めて感心した。因みに、王貞治が年間ホームラン五

十五本の日本新記録を樹立したのも、この秋の話題だった。

東海道新幹線は、オリンピックに照準を合わせて、この年の十月一日に開業している。東京・新大阪間を四時間で結ぶと記録にはあるから、在来線の所要時間をほぼ半分に短縮したわけで、画期的なことにはちがいない。だが、私は新幹線に乗って上京したわけではない。学生の身分で、新幹線の料金はとても及ぶとこでなかった。そんなところにお金を使うくらいなら、少しでもましな駅弁を食べて空腹を癒したかった。

振り返ってみると、私の東京体験はそれまでにただ一度だけである。大学に入学する年の春休みに、あこがれの東京見物をして以来、京都より東への旅行といえば、ただいちど友人を訪ねて名古屋まで二時間の旅をしたにすぎない。だから、これは私にとって二度目の東京大旅行、しかも学会発表という任務(?)を背負っての旅立ちである。いやが上にも緊張感が増そうというものではないか。第三者から見れば、お上りさんも同然の様子だったにしても。

慶応義塾大学の三田校舎を目にしたのは、もちろんはじめてである。母方の叔父が慶応の出身で、ことあるごとに慶応の話は聞かされていたから、名にし負う大学に来た感激があった。私の当日の発表題目は、「左思詩論—詠史詩を中心に—」というもので、発表時間十五分、質疑応答五分だったと記憶する。私は六朝文学を研究テーマとしていて、そのころ手を着けかけていた三世紀末西晋の詩人左思の「詠史詩」について、初歩的な考察の成果を中間報告したのである。

発表の準備中に先輩から受けた助言によれば、二百字の原稿を普通のスピードで読めば、ほぼ一分、したがって原稿用紙十五枚程度に内容をまとめれば、まあうまくゆくのではないかとのことだった。だから、その助言にしたがって原稿を用意し、何度も朗読のリハーサルを一人で試みた。ところが、今から顧みてほとんど信じがたいことだが、私は発表のための資料を全く準備していなかった。ずぼらだったのかも知れないが、聴講者に資料を配付するなどということに全然注意が向いていなかったのである。ほかの発表者がガリ版刷りの資料を配付しているのを見て、しまったと後悔したが、すでに手遅れ、なるようになれと、腹をくくって演壇に登った。

とにかく無我夢中のうちに二十分が過ぎた。いくつか質問もあったが、概して好意的な反応だったようなので、一安心した。どうやらいいかったことは理解してもらえたように感じたからである。そのころは、院生レベルでの他大学との交流はほとんどない状態だったから、学会にはどんな人がいて、どんな研究をしているのかを垣間見ただけでも、ずいぶん世間が広がったような気がした。同じ六朝文学を研究していた九州大学の林田慎之助さんや、広島大学の森野繁夫さんとはじめてことばを交わしたのもこの時である。ただ、自分の発表に神経を集中していたせい、他の人の発表内容については、まったく覚えていない。文学関係の発表やシンポジウムはすべて聴講したはずなのだが。

記憶が鮮明なのは、夜の懇親会である。会場は、有名な留園だった。もっとも、そこが有名だと知ったのはずっと後の話で、その時はえらく豪勢なところだ程度の印象を持ったに過ぎない。雰囲気は豪華というだけでなく、やがて薦被りの鏡開きがあり、慶応のマンドリンクラブの女子学生によるハワイアンスタイルの演奏というアトラクションまでついて、たいへん華やいだ楽しい気分にな

った。料理の美味だったことはいうまでもない。学会の懇親会とはかくもすばらしいものかと感激した。それは恐らくホスト役だった慶応の奥野信太郎先生の肝いりによるものだったろうが、後で聞くと、慶応の先生方はこの饗宴の始末でかなり苦勞されたらしい。当事者には申し訳ない話だが、私にはひととき印象鮮やかな懇親会だった。

この慶応での大会がきっかけで、やがて就職してからも毎年の大会にはきわめて勤勉に参加しつづけた。海外に滞在していた期間を除いては、現在に至るまで、ほとんどすべての大会に出席しているはずである。もっとも、研究発表という主体的な意欲を持って参加したのはかなり以前のこと、近年は役員会のしごとや、研究発表の司会という役目のために出かける方が多くなってしまった。やはり自分の中に強く求めるものがあったこそ、学会も有用な存在たりうと思うのだが、今は残念ながら参加すること自体が目的化している。困ったことだが、さしあたってこの状態から抜け出せそうにはない。

かつては、地方での大会には別の目的もあって、心待ちにしていた。札幌や秋田での大会の折りには、そのあと友人たちと近隣の景勝地を旅行して楽しんだ。土地の名物料理を味わうのも、大きな楽しみの一つだった。だが、最近のように会員数が二千人を超える規模になると、人手などの関係で、地方の大学に大会開催をお願いしにくい状況が生じている。これも頭の痛いことである。何かよいアイデアはないものだろうか。

(2001. 11. 25)



# 「第1回」蘇軾逝世900年記念学会に参加して

野村 鮎子 (奈良女子大学)

今年2001年は蘇軾没後900年にあたる。これを記念して、蘇軾逝世900年記念学会が8月20日～23日の4日間、故郷四川省眉山市で開催された。参加者総数は約150名。日本から参加したのは13名だった。

夏休み前、締め切りを過ぎてても発表原稿が出来上がらず、出席を取り消そうかと思っていた矢先のことである。四川大学古籍整理研究所の元所長で、蘇軾研究学会の重鎮曾棗莊教授からのメールが届いた。「2101年には没後1000年を迎えるものの、今の我々は誰一人としてそれに立ち会うことはできない。この百年に一度の機会を逸してはならない」。

私は昨年、笈文生氏との共著で『四庫提要北宋五十家研究』（汲古書院）を上梓したが、曾教授はこの本に長文の序を寄せてくださった。長年蘇軾研究に携わってこられた曾教授にとって、地元で開かれる記念学会は特別の意味をもつ。曾教授の誘いを断ることなどでできそうにもない。

眉山市は昨年12月、周辺の彭山県や青神県など6つの県を合併して市に昇格し、人口340万を擁する都市となった。もとの眉山県は東坡区と名を変えていた。かつての白壁瓦葺の落ち着いた町並みは消えうせ、拡張工事によって6車線となった大通りにはビルが雨後の筍のように林立している。到るところに掛けられた「眉山熱烈歓迎蘇軾研究専門家」の横断幕が歓迎ムードを演出していた。

記念学会は第13回蘇軾学会を兼ねたものだが、今回は中国共産党眉山市委員会、眉山市人民政府との合同開催である。そのため開幕式や閉幕式では最前列に市の幹部が並び、市の共産党書記長や

市長の挨拶が延々と続いた。「東坡精神と三蘇文化を發揚して眉山の改革開放を大胆に進めよう」という内容で、眉山がいかに将来性のある町で投資の価値が高いかを力説するものだった。「東坡精神」「三蘇文化」というのはこの町のスローガンらしいが、正確には何を意味するのかはわからない。これら幹部の講話にはすべて英語の通訳がついた。欧米からの参加者は全員流暢な中国語を話すので通訳の必要はないのだが、国際学会であることを演出しようというものらしい。学会の様子は連日、眉山電視台のトップニュースとして放映され、『眉山日報』の紙面は学会と記念行事に関する特集記事で埋まった。

学会開催中の一幕。会議だという呼び出しで会場に駆けつけてみると、眉山に投資する企業の経済合作調印式だったことがある。我々外国人はニュース用の恰好のお飾りである。そんなこともあって学術研討会のスケジュールがタイトになり、討論の時間が少なくなったのは残念だ。

日本人の発表者は全部で8名。全体会で笈文生氏（立命館大学）が日本側を代表して祝辞を述べ、池澤滋子氏（中央大学）が「《寿蘇》—日本明治大正時代的東坡熱」についての報告を行った。中原健二氏（仏教大学）「蘇軾与“羽扇綸巾”」、保苺佳昭氏（日本大学）「蘇軾与楊繪有関之詞」、松尾肇子氏（愛知教育大学）「対日本近衛家族所蔵蘇軾詩文集研究」、三野豊浩氏（愛知大学）「陸游在黄州回憶的蘇軾」、伊藤晋太郎氏（慶応大学院生）「三蘇与諸葛亮」、野村鮎子（奈良女子大学）「蘇軾く保母楊氏墓誌銘」之謎」、以上は分科会での発表である。いずれ記念論文集が出版される予

定なので、発表内容についてはここでは触れない。学会第2日目はマイクロバスに分乗して市内の三蘇祠と郊外にある蘇墳山を見学した。ガイドはもちろんのこと救急医療班まで同行し、パトカーが先導するVIP待遇である。この日は明け方に雨が降ったのだが、蘇墳山までのぬかるんだ道に村人が砂利を入れて整備してくれていた。道の両側に渡してある歓迎用の横断幕は村の宣伝班による手作りだ。蘇墳山では村人総出の歓迎で、あっという間に子供たちに囲まれた。我々外国人の一挙手一投足を食い入るように見つめている。これではどちらが見学者なのかわからない。

ガイド嬢によれば、蘇墳山は明代に発見された蘇氏の墓園とのこと。荒廃と再建を繰り返えし、現在のものは1986年の建造。さらに学会の開催にあわせて補修を終えたばかりだった。墓石は全部で4基ある。蘇洵と程氏の合葬墓、蘇軾の嫡妻王弗の墓、それに蘇轍と蘇軾の墓である。しかし、蘇軾は海南島から北帰する途上、常州（江蘇省）で亡くなり、蘇轍によって汝州（河南省郊県）に葬られた。蘇轍の墓もかの地にある。ここ蘇墳山の蘇軾と蘇轍の墓は記念碑というべきものだが、事情を知らない一般の人々はこれを墓だと錯覚するに違いない。研究者の中にもこれは文化財に対する冒瀆だという人もいた。しかし、「是る処の青山 骨を埋む可し」と言った蘇軾のことである。墓がどこに何基造られようとあまりこだわらないのではないか。私はそんな気がしている。

夜には市委宣伝部と市文化体育局のプロデュースによる文芸晩会が開催され、幼稚園児による東坡の詩詞

の朗誦、眉山中学の女生徒が半年かけて練習した創作舞踊「蘇祠瑞蓮」や新曲「我愛你—東坡故郷」の女声合唱が披露された。

仄聞するところ、没後900年の記念学会をどこで開催するかについては、眉山市、常州市、郊県県の三者の間で熾烈な争奪戦が繰り広げられたという。結局、故郷が勝って今回の記念学会となったものらしい。たかが学会にこれほど躍起になる背景には、地の利に恵まれぬ地方都市は国際学会を誘致することで対外開放をアピールするしかないという切実な事情がある。

さて、学会終盤に聞いた話である。この逝世900年の記念学会、来年は郊県、再来年は常州でと3年連続して開催されることになったとのこと。すなわち今年は「第1回」目。1年や2年の違いにこだわらず互いの面子を立てるのは、中国らしい裁定だと妙に納得した。ただ、「百年に一度」のセリフに誑かされた(?)身としてはいささか心中複雑。曾教授の別れ際の言葉「来年の逝世900年記念学会でまた会いましょう」に、笑って「はい」といえなかった私はきっとまだ修行が足りないのだろう。(2001.10.20)



# 中唐文学会の説

静永 健 (九州大学)

すでに同形態のものが幾つかあると思われるが、この集まりは、日本中国学会の大会前日、すなわち10月初旬のその金曜午後には開かれる小研究会の一つである。本年度も、去る10月5日、福岡市東区の九州大学文学部において開催。全国各地より約60名の参加者を得て、五つの研究発表が行われた。ちなみに、年一回ずつの本会も、今年ようやく第12回を迎えることができた。

この集まりのそもそもの発端は、今から十数年前、川合康三氏(京都大学)と松本肇氏(筑波大学)との出会いにあるという。詳しくは、両氏の編著『中唐文学の視角』(創文社1998年刊)の「まえがき」、および『日本中国学会報』第53集(2001年号)の「学界展望(文学)」欄(p. 355:執筆は竹村則行委員)などをご参照願いたい。 「それまで互いに名前は知りながらも、言葉を交わす機会すらなかった」両氏が、「一見して故の如く」たちまち意気投合し、「出身大学という縦割りの関係」を打ち破って「同じ世代の共通する問題意識を抱える人たちが集う場」として全国に呼びかけたのが、その創設の由来であるとのことである。

さて、付度するに、他の同規模・同形態の研究会も恐らくそのようであろうと思うが、この会の参加者は、さきの文にも見えたように、各地の、かつは各出身大学をそれぞれ異にする若手研究者が一堂に会するものである。それぞれ同じテーマに関心を寄せつつも、その研究の手法に微妙に違いがある「同学」との出会い、我々にとってこの上なく心地よい刺戟である。しかもこの刺戟は、私のささやかな経験において回顧しても、大学院に在学中の、いまだ「学会(界)」という世界を知って間もない「若手」研究者にとって、これほど有り難く心強いものは無かった。本紙上には大変憚りのあることを敢えて書き綴るが、学会の大会は、大学院在学中、およびそれを出たばかりの「若手」には、それはそれは恐ろしく、そして冷酷な場所である。それまで著書や論文を通して

しかお名前を存じ上げない「先生」方が会場のあちこちにお出でになり、しかも発表会場は広大、研究発表はいずれも時間厳守で粛々と進行し、質疑応答もいきなり高次元で、我々浅学の者たちは発表資料を握りしめ、その頭上に飛び交う艦砲射撃を只々首をすくめて望見するしかない、そして大会初日の懇親会は、遠方よりトボトボとやってきた貧乏学生を嘲るかのように、高額で贅沢の限りを尽くした雅宴である。「全国学会ならば、どの分野のものも皆このようである」と言えばそれまでなのだが、私には何か鴻洞として扱すべからざる気持ちがしばしばするのである。一方、我々の小規模研究会は、学会前日の緊張は多少あるものの、発表や質疑応答の内容には、ある程度の随意的な発言も許され、のびのびと談論できる自由な雰囲気がある。なお、これは私自身も見習いたいと願っていることだが、この会には、穏和な表情で、はじめて参加した若手院生にも優しく声をかけ、キャリアや出身大学の別なく様々な談笑を愉しもうとされる方々が多数参加しておられる。そして、更に有り難いことは、この会に所属していることを通じて、年一回の大会以外にも、読書会など様々な活動に参加できることである。この読書会については会報『中唐文学会報』の既刊各号に紹介されているが、関東地区の会員を中心とした孟浩然・元微之の読書会、関西地区での韓孟聯句や『御覽詩』の会読、そして中四国九州地区での劉禹錫読書会などは、この会の取り持つ縁で開始されたものである。川合・松本両氏の邂逅を始まりとして、この会の活動は、満々とたたえられた湖水の上に、激瀧と閑かにひろがりゆく波紋のように、果てしなく拡大しているのである。

ところで今年、全くの地理的条件によって幸運にも大会幹事を仰せつかった私であるが、この間、全国各地の多くの方々から問い合わせを受けたことの一つに、この会の名称「中唐」と実際の会の活動との関係がある。つ



まり、この会は四唐説の一時期、具体的には韓愈・柳宗元、白居易や劉禹錫の詩文、もしくは「鶯々伝」「李娃伝」などの唐代伝奇の研究者のみの集まりなのか、という質問である。思うに、いま約120名を数える全国の会員すべてにこの問いを發したとして、「是的。」と肯んずる方は恐らく誰一人としていないであろう。例えば本年度の『中唐文学会報』第8号（好文出版）をご覧いただきたい。そこに収められた論文や報告、そして「大会プログラム」掲載の研究発表は、実に多方向多分野に發展し、かつ対象とする時代も「中唐」を中心に上下数十年そして数百年間に拡大しているのである。「民族の十字路」という言葉があるが、この「中唐文学会」は、雅俗両系統の中国古典文学史の中でも、その双方が交錯し、かつ、思想・歴史・語学や日中の比較文学など、まさに「中国学の十字路」の感がある。これも、「出身大学の壁を越える」という会員相互の認識が、まさに現代の「ボーダレス」の風潮と共鳴し合い、このような素晴らしい發展を遂げた所以であろう。もはやくだくだしい「入会規定」などは一切不要、我々と共に語り合いたいという方であれば、どなたでも、何時からでも、参加することが可能なのである。

しかし、このように年々拡大發展の一途にある我々の集まりも、ここに来て、ひとつの「節目」を迎えつつある。それは、この会「草創以来」の会員の参加問題である。周知の通り、我々の会は、まさに日本中国学会の理事会・評議員会の時間帯に重なる。従って、我々のメンバーのうち学会役員に選ばれた方々は、必然的に不参加となってしまう。また、そうでなくとも、本務校で重要かつ繁忙な役職にある方々は、その日が丁度「三連休の前日」に当たるために、学会出張が急遽困難になってしまうケースも例年あとを絶たない。そして、この会の設立当初、当時40代前半から30代後半の年齢の方々が中心となり、「それ以上の年齢」の方々の入会を謝絶したという経緯から、「爾來十餘年、自らもその齡に達した」として、潔くこの会から退きたいとお申し出もある。もとより、会の入退会は個々の自主的な判断に委ねられている。だが、本年度幹事としての立場から、最後に一点だけ明らかにしておきたいのは、もし、その退会の理由の中に、「自分が参加していることで、若手会員たちの

活発な意見交換が阻害されるのでは…」という危惧があるとすれば、そのような遠慮は全く不要であるということである。哲・史・文を包括する人文学系の研究は、その研究者の年齢や千差万別の人生経験によって、さまざまに深化し、変容するものである。もし我々の会が、そのような過去の成立の経緯に拘泥して、いつまでも「年齢制限」を設けているとしたら、それはいささか迂闊な判断と言うべきであろう。時には年長者の意見に耳を傾けることで、自己の研究に大いなる啓発が得られるということは、これまで誰しもが経験しているところである。また、人文学について「老成しての後に見えてくるもの」が有るとすれば、それは同時に、若者には「若者にしか見えないもの」も有ることにも繋がるはずである。キャリアを積んだ者の意見に「権威」があり、それによって若手の意見が阻害される、という現象は、近年、そして今後の中唐文学会においては、全くの杞憂に過ぎないと私には思われるのである。

十数年前と今とでは、我々の研究活動も大いに變化した。各種の要求に対応した優れた辞書や工具書が陸續と出版され、もはや「辞書に無い言葉」を見つけることの方が難しく、更に加えて、コンピュータを駆使して用例や参考論文の検索も立刻に出来るようになった今日、「先輩の不用意な発言」に惑わされる哀れな後輩はほとんど存在しない。コンピュータが万能であるとは思わないが、先輩が何日も徹夜しフラフラになりながら探し出した用例が、今やコーヒーを片手にキーボードを少し叩くだけで、瞬時に探し当てる事が出来る時代である。そして、いま確実に言えることは、これらコンピュータ等を駆使した情報処理技能は、我々のように「後年」になって接し得た者たちよりも、これから学界に登場してくる「後生」の方が、はるかに習熟しているであろうということである。もはや世代間の「遠慮」は無用である。そればかりか、次々に更新される技術や情報を、我々は今後、更にもっと若い世代の人々より常に「下問」を恥じることなく教を乞う必要があるのではなからうか。このような時代にあって、これら「若者主導」の小規模研究会は、今後の我が中国学界全体を「下支え」する重要な役割を果たしてゆくであろうことは、まず間違いのないことだと思われる。

# 中国古典小説研究会の紹介

中里見 敬 (九州大学)

1986年夏、今西凱夫・西岡晴彦・大塚秀高・大木康の呼びかけによって、国内の古典小説研究者が信州大学の施設に集まり合宿を行ったのが、中国古典小説研究会の発足であった。以後、毎年夏に2泊3日の合宿（今年から大会と呼ぶ）を開くとともに、関東を中心とした例会や講演会などを通して、古典小説研究者の意見・情報交換の場となっている。また会の研究誌として『中国古典小説研究』（1995-）を年一回発行している。その前身には、大塚秀高の献身的努力により刊行されてきた『中国古典小説研究動態』（1～最終〔7〕号、1987-1994）がある。

研究会設立時の主旨として、それまで各地でバラバラに研究を行っていた古典小説研究者が一堂に会して、最新の研究情報を交換し、会員相互のネットワークを築くことが期待されていた。この15年間の活動を通して、会員数は当初の20名前後から100名を超えて、この分野の研究者の大半が参加するまでになり、自由闊達な雰囲気と相まって、当初の目的は十分に達せられている。特に合宿では、昼間の研究発表でみっちり討論した後、夜はお酒を飲みながら小説研究の話や全然関係ない話をしてたっぷり交流できるのも、この研究会のよき伝統となっている。比較的、下戸の多い研究会ではあるが、十分に盛り上がるのは、専門を同じくし気心の知れた会員同士だからだろうか。

海外の研究者や、隣接諸分野の研究者との交流も、研究会の企画者が努力してきた点である。日本に滞在中の海外研究者が、夏の合宿や例会で講演したり、質疑に加わることは珍しくないし、戯曲・中国語学・歴史学・日本文学など関心の重なる分野で活躍中の研究者をゲスト・スピーカーとして招く試みも数多く行われてきた。

古典小説研究会が組織として正式に会長や幹事を置き、

機関誌を発行するようになった1995年以後、大塚秀高・鈴木陽一・金文京が会長を歴任し、現在は岡崎由美に引き継がれている。事務局は発足時の大木康から、笹倉一広・丸山浩明、そして現在再び笹倉一広が煩雑な事務処理・連絡をこなしている。こうした関東地区の会員を中心とした情熱的な運営があればこそ、大学を超えた研究者のつながりが実現されてきたのであって、その尽力は並大抵でなかったはずである。

筆者は院生時代に第3回の合宿に参加して以来の会員であり、私なりの関心からこの15年の古典小説研究会の活動とその意義を以下に記してみたい。研究会の会員がほぼ日本国内における当該分野の専門家を網羅するために、以下の記述もいきおい日本の古典小説研究の動向を紹介するものとなることをご了解いただきたい。

1990年代以降の古典小説研究の方向を決定づけたといえるのは、井上泰山・大木康・金文京・氷上正・古屋明弘『花関索伝の研究』（汲古書院、1989）である。東西の語学・戯曲・小説研究者が共同して、説唱詞話『花関索伝』のテキストに解説・校注・資料・影印・附論・索引を施した『花関索伝の研究』は、古典小説研究会自体の研究成果ではないものの、複数の会員が参加しており、内外の専門家によってきわめて高い評価を受けていることはここで改めて言うまでもなからう。研究対象が演劇でも小説でもない語り物（説唱文芸）、しかもその存在すら知られていなかった出土資料であったことは象徴的である。そもそも花関索とは、正史『三国志』には見えない架空の人物であるが、『花関索伝』の発掘によって彼を主人公とする語り物が明代に演じられていたということ、また『三国志演義』の版本の中には花関索の登場するものがあることなどが明らかにされてきた。これ以後、古典小説研究は語り物・演劇との関係を抜きにして



論じることはできなくなったといって過言ではないし、神話・英雄叙事詩・演劇と語り物の形式（楽曲系と詩讀系）・文学や文化における中心と周縁といったテーマへと問題はひろがっていった。また、よりマイナーな『隋唐演義』、『南北宋志伝』といった講史小説の研究が盛んになったのも、これと無縁ではない。こうした潮流の中から生まれた独創的な研究のいくつか、例えば『三国志演義』版本の研究は、日本の研究レベルが国際的に群を抜き、その成果は海外の研究者からも注目されている。

その9年後に刊行された神奈川大学中国語学科編『中国通俗文芸への視座：新シノロジー・文学篇』（東方書店、1998）は、尾上兼英・大木康・鈴木陽一・金文京・大塚秀高・山口建治・岡崎由美といった当研究会の主力が結集して、『花関索伝の研究』以後のパラダイムを代表する研究論文集だといえよう。従来の小説研究・小説史と違って、語り物や演劇といった通俗文芸との関わりの中で小説をとらえようとする点に、論者の共通の関心があり、専門分野が細分化した感のある中国の研究とは一線を画す斬新な見解に満ちている。読者層の研究や社会史との関連なども含めて、古典小説研究会の10年あまりにわたる活動の成果が、ここに結実しているといっただけでいいだろう。

ところで、第1回の合宿で今西凱夫は「中国の小説のどこがおもしろいのか」と、小説研究者としてのある種のコンプレックスを表明したと聞く。一方で、テレビ人形劇や漫画・ゲームなどの流行を背景に、『三国志演義』や『封神演義』を研究する学生・院生が急増するということがあった。こうした世代間ギャップを含めた小説研究の現状に対して、学界には違和感を感じる向きもないではなかろう。筆者の考えでは、個々の研究者の意識は別にしても、古典小説研究会の活動は結果としてこれまでの文学観や文学研究のあり方を脱構築しつつある、少なくともそれに再考を迫っているのではないかと思う。

なるほど、今西の発言に代表されるように、中国古典小説の中に一流の文学作品といえるものがどれだけあるかという悩みは、中国古典詩文や他国文学・小説の研究に対して我々がやや肩身の狭い思いをしてきた理由の

一つであったかもしれない。それでは、近年の若手研究者がもっと「おもしろくない」講史小説や神魔・武侠小説をしきりに論じるのはなぜか。これまでの文学研究が、文学至上主義とでもいうべき価値観、実は近代国民国家やロマン主義、リアリズムといった歴史的な価値観を前提としていたのに対して、ここ10年あまりの古典小説研究はそうした価値観によって排除されてきたものの中に、広大な中国の物語世界の脈を再発見してきたのである。その対象はこれまで文学史に取り上げられることのなかった作品から、文字に書かれない口承文芸にまで広がる。言い換えると、これまでの小説研究が研究対象を一流作品に限定することによって、文学研究や文学史の制度に奉仕してきたのは、何を守るためであり、何を排除するためであったのか——このような知の制度をめぐるポスト構造主義的な問いかけを、現在の古典小説研究そのものが孕んでいるといえるのである。

思えば、中国で胡適や魯迅、日本で塩谷温や狩野直喜らが小説を含んだ「中国文学」という知の体系を創出してから一世紀、古典小説研究はいまなお文学をめぐる知のあり方にチャレンジを続けているのだといえよう。古典小説研究会における議論は謹厳な実証研究が中心であるとはいえ、そうした研究の積み重ねが持つ意味を筆者なりに考えると、大上段な嫌いがあるとはいえ、こうした一面を指摘しておくのも無意味ではないと思う。

なお、『日本中国学会五十年史』（汲古書院、1998）所収の座談会「これからの中国研究」では、金文京・岡崎由美両会員の見解が述べられている。ご参照いただきたい。

中国古典小説研究会のウェブ・ページと連絡先は以下の通り。

<http://sasa1.misc.hit-u.ac.jp/ZGXY/zgxy.htm>  
[ce00270@srv.cc.hit-u.ac.jp](mailto:ce00270@srv.cc.hit-u.ac.jp)

（文中、敬称略）

## [ 大会委員会報告 ]

合山 究

大会委員会は、その名の通り、大会に関することを取り扱う委員会ですが、なかでも最も大きな任務は、年一回の大会を行うための開催校を選定することです。従来、関東地区（東京）とそれ以外の地区（地方）とが交互に大会を行ってききましたので、福岡大学（九州）の次の開催校は関東地区の番となります。しかし、関東地区には開催希望校がありませんでしたので、平成14年度の第54回大会も地方で開くこととし、東北大学（中嶋隆藏代表）をお願いすることといたしました。福岡大学で開かれました評議会・総会ですでに報告し承認されたとおりです。東北大学としては、1979（昭和54）年以來の開催となります。開催日は、2002年10月12日（土）13日（日）を予定しております。

開催校は、担当校の準備の都合などの関係でできるだけ早く決定する必要があります。そこで、いささか早すぎる感もありますが、今回の委員会で東北大学のあとの開催校をも決めることとし、平成15年度（第55回）の大会を筑波大学をお願いすることとしました。筑波大学（松本肇委員）の了解を得ましたので、理事会にはかり、承認されました。最終決定は、明年10月に東北大学で開かれる評議会において行われますが、一応お含み置き下さい。

現委員会が選定する開催校は、以上の二校で終わりです。それ以後の選定は次期委員会によってなされますが、もし大会開催を希望する大学がございましたら早めにお知らせ下さい。次期委員会に申し送ることに致します。

## [ 論文審査委員会 ]

丸尾 常喜

### ①論文審査について

論文審査委員会は旧学術専門委員会の活動を引き継いでいるが、会の性格が異なる。旧学術専門委員会は哲学・思想、文学・語学両部門から会員の直接選挙で選ばれた25名の委員によって構成され、委員会は委員以外に投稿査読を依頼することがまれにあったといえ、基本的に委員会で学会報掲載論文と学会賞受賞者を選定した。だが新しい論文審査委員会は理事長指名の委員長（理事）が会員の中から依頼した若干名（理事長による依頼、今回は8名）で構成される一種の執行機関である。したがって委員は論文査読者にはならず、各論文3名の査読者の報告にもとづいて審査・決定することが規約に明示されている。新委員会ではその運用規定を定め、「査読者は原則として評議員の中より選び、論文の内容によっては一般会員に依頼すること」にした。

なお、情報公開を若干でもすすめる見地から、「不掲載論文についての審査内容に関する質問には答えないこととするが、審査結果通知書には簡単に不掲載理由を明示する」こととした。

### ②学会賞受賞者決定について

ただ執行機動的要素を持つとはいえ、「学会賞受賞社選定」も本委員会が行うとされているため、委員会の構成もその任にたえるものでなければならず、今次の委員会委員は評議員の中から依頼することとし、哲学・思想部門3名、文学・語学部門4名を選んで依頼し、これに幹事委員1名を加えて8名で構成されている。とはいえ、こちらも広く評議員の関与に道を開き、運用規定で「選定に当たってはあらかじめ評議員全員に対して推薦を求め、その推薦を重要な参考資料とする」ことを定めた。

### ③投稿締切日について

従来の執筆要領では締切日が1月末日と定められていたが、2月が大学の入試期間に当たるため、査読者の負担が大きく、新執筆要領では1月20日と改めた。長いあいだ1月末締切とされてきたため、会員各位にはまちがいのないよう十分御注意いただきたい。

4月29日（東京）、9月15日（京都）、10月6日（福岡）の3回開催。

## I. 学会ホームページの開設

興膳理事長の「学会ホームページの開設をできるだけ早い時期に実現したい」との意向を受けて、当委員会としては、学会ホームページの立ち上げを今年度の最重点課題に位置づけて、その実現に努力し、福岡大学で開催された第53回大会でβ版（試作品）の公開にこぎつけた。理事会や評議員会、β版を見ていただいた会員諸氏のご意見も参考にしながら改良につとめ、12月初旬には国立情報学研究所の学協会情報発信サービスのサーバーにアップし、仮運用する予定。そして来秋の大会までに正式公開できるように準備する。

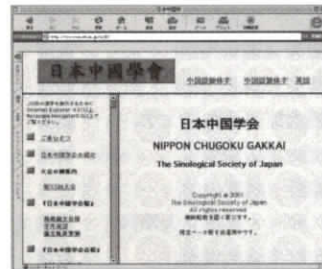
このHPは、日本語版のほか、英語版・中国語簡体字版および繁体字版を用意する。

URL <http://wwwsoc.nii.ac.jp/ssj3/index.html>

英語版は、末尾が [index・e.html](#) 中国語版は、末尾が [index・c.html](#) となる。

なお、現在までのHPの内容は、以下の通り。

- ① 理事長挨拶
- ② 日本中国学会の紹介
- ③ 第53回大会の案内
- ④ 「日本中国学会報」第1集～第52集掲載論文目録
- ⑤ 学界展望
- ⑥ 「日本中国学会報」掲載論文執筆要項
- ⑦ 「日本中国学会報」2001年第1号
- ⑧ 会則
- ⑨ 理事・評議員・各種委員会委員名簿
- ⑩ 理事会報告
- ⑪ 各種委員会報告
- ⑫ 国内学会消息
- ⑬ 事務局からの案内(各種お知らせ・入会案内・その他)



このうち⑤「学界展望」は、『中国文学研究文献要覧一戦後編』1945～77年（1979年日外アソシエーツ）があるので、78年以降

のもの5年分づつ第52集からさかのぼり、5年計画で入力する計画である。また⑫国内学会消息は、将来的には今後の予定も掲載したいと考えているが、事務局の体制が整うまでは、この他の事項も含めて、当面発信のみで受信は行なわない。「掲示板」なども、先送りする。

またHPのためのワーキンググループをつくるに際しては、将来計画特別委員会とも相談しながら進める予定である。

来秋の本格的な稼働までには、メンテナンス管理やセキュリティの問題など、早急に取り組むべき課題がまだ多く残っている。会員諸氏の積極的な提言を期待する所以である。

## II. その他

6月に香港で開催されるIRG国際会議（情報技術に関する国際標準化機構と国際電気標準会議）に松岡榮志委員を派遣し、旅費の一部を学会が補助する件について、帰国後、学会に報告することを条件に了承。

2002年7月に愛知県立大学で開催される国際漢語学会への後援問題について意見交換。今後、日本で開催される国際学会への学会としての対応の原則を取り決めておく必要などが議論された。

以上



## [ 将来計画特別委員会 ]

池田 知久

### 委員

委員長	池田知久（東京大学）
副委員長	堀池信夫（筑波大学）
委員	佐藤鎌太郎（北海道大学）
委員	野間文史（広島大学）
委員	向嶋成美（筑波大学）
委員	山口久和（大阪市立大学）
委員	渡部英喜（盛岡大学）
委員・幹事	久保田知敏（聖心女子大学）

### 第1回委員会

日時：2001年4月15日（日） 13：00～17：00

場所：学士会館本館 第309号室

出席者：8名

副理事長	大上正美（青山学院大学）
委員長	池田知久（東京大学）
副委員長	堀池信夫（筑波大学）
委員	佐藤鎌太郎（北海道大学）
委員	向嶋成美（筑波大学）
委員	山口久和（大阪市立大学）
委員	渡部英喜（盛岡大学）
委員・幹事	久保田知敏（聖心女子大学）

欠席者：1名

委員	野間文史（広島大学）
----	------------

### 議題

#### 報告事項

2000年11月26日の日本中国学会新理事会準備会及び2001年3月3日の同第2回準備会の審議をふまえ、池田委員長から以下の報告がなされた。

将来計画特別委員会の任務

- 新会則施行後の問題点の検討
  - 1 新入会員の承認について
  - 2 会則変更規定について
- 事務局（事務所）問題
  - 1 当面斯文会に委託するが、現行〔業務委託：5000円／月、倉敷料：10000円／月（年間18万円）〕のうち業

務委託料を10000円／月に値上げを検討する

- 2 在庫している会報についての処理方を考える

#### ●学会の新規事業計画

- 1 学会報全号のCD-ROM化
- 2 その他

### 審議事項

以下の各点について委員に諮り了承された。

(1)新会則施行後の問題点の検討

1 新入会員の承認について

現行の第6条1では新入会員の承認について「理事会において審議して仮に会員として承認し、正式には評議員会の承認を得ることを要する」とある。理事会は5月と10月に、評議員会は10月に開催されており、5月の理事会で仮に会員として承認された場合、10月の評議員会まで正式承認を待たねばならない。ここで問題となるのは、前年10月の評議員会以降に入会申請をして5月の理事会で仮に会員として承認された人が大会での発表を希望した場合、入会申請から大会発表まで最長2年近く待たされることである。こうした不便を解消するために、第6条1の申し合せ（あるいは施行細則・内規など）として「仮会員は大会での研究発表をすることができる」などのルールを設けることを、本委員会として提案する。

2 会則変更規定について

現行の第17条では会則変更には全会員の投票が必要とされているが、これに従うと、会費の変更など比較的発生頻度の高い変更にも多大な労力・時間・費用を要することになる。こうした会則変更手続きには問題があり、改善せねばならない。しかし、当然この変更も第17条に則って行わねばならず、全会員の投票が必要とされる。よって、この会則変更規定の改善は、会則中に本件以外の改善すべき点が生じた段階で、同時に行うことが望ましい。新会則施行後の状況を見守りながら、会則全体をもう少し詳しく検討する必要もあり、以後継続して審議する。

(2)事務局（事務所）問題

事務局（事務所）については、当面は現行の業務委託料を値上げして斯文会への委託を継続することを本委員会

として理事会に提案するが、将来的には本部設立を考慮する必要がある。また、倉敷料については、在庫している会報についての処理方を検討し、これ以上在庫を増やさない方向にする。

### (3) 学会の新規事業計画

#### ● 学会報全号の CD-ROM 化

将来の目標としては、学会報全号をオンライン化する。このためには著作権・校正など処理すべき問題があり、また、テキスト形式にするのにも時間を要する。そこで、それまでの過渡的な処置として、これまでの学会報全号を画像として CD-ROM 化する。

### (4) その他

#### 1 IT 対応について

ホームページの開設にともないその維持・管理、学会報などのオンライン化・データベース化、掲示板や Eメールを利用した連絡など、コンピューターの普及した社会への対応がせまられている。日本中国学会内にもそのための諸活動や委員会の設置が必要である。

#### 2 漢文教育・大学入試の漢文について

高等学校国語教育における漢文授業の縮小傾向や大学における国語科教員免許取得の漢文必修単位減少に対する全国漢文教育学会の取り組みが紹介され、日本中国学会でも何らかの対応をすべきではないかとの提案がなされた。これに対し各委員から、日本を代表する中国学の学会として、この問題をどう考えるかは重要であるが、会員の中には様々な立場・考え方が予想され、本学会が戦前の国家主義的な中国学への深刻な反省から出発した経緯もあり、漢文教育強化の主張が、単に昨今の新たな国家主義的傾向や右翼的傾向に迎合したものとの誤解されないよう注意深く取り組む必要がある等の意見が出された。また、具体的な対応をする場合、検討すべき課題も多いとの指摘もなされた。この問題は重大な問題であり、臨時的委員会を開いて検討していく。

#### 3 国際的活動について

国際交流については別委員会もあり、基本的にはそちらに任せることであるが、本学会の将来像の問題として、従来世界の中国研究者に向けての情報発信が少なく、この点を改善する必要がある。そのための方法として、

- 日本の中国学の代表的著作を英文に翻訳する。
- 学会報の要旨は中国語と英語の両方をつける。

の2点を提案する。

以上

## 第2回委員会

日時：2001年10月6日(土) 12:15~13:00

場所：福岡大学 A棟地階講師控室1

出席者：8名

委員長	池田知久 (東京大学)
副委員長	堀池信夫 (筑波大学)
委員	野間文史 (広島大学)
委員	向嶋成美 (筑波大学)
委員	山口久和 (大阪市立大学)
委員	渡部英喜 (盛岡大学)
委員・幹事	久保田知敏 (聖心女子大学)
オブザーバー	大地武雄 (二松学舎大学)

欠席者：1名

委員	佐藤鍊太郎 (北海道大学)
----	---------------

## 議題

### 報告事項

2001年10月5日の日本中国学会理事会の審議をふまえ、池田委員長から以下の報告がなされた。

#### (1) 委員会の活動報告について

会報の刷新にともない、各委員会の活動状況を出版委員会に報告することになった。当委員会では、4月および今回の議事要録を縮約し送付する。なお、この報告はホームページで公開される予定である。

### 審議事項

以下の各点について委員に諮り了承された。

#### (1) 議事要録の承認

第1回将来計画委員会議事要録案が提示され、一部訂正のうえ、承認された。

#### (2) 新会則施行後の問題点の検討

現在の所、新入会員の承認など緊急を要する問題には一応の結論が出ている。会則変更規定の見直しについては、いずれ具体的な会則変更の必要が生じたときに同時に着手することとし、当分は新会則施行後の全体的な問題点を検討しつつ、継続して審議する。

#### (3) 漢文教育について

オブザーバーに大地武雄二氏を迎え、この問題に対する全国漢文教育学会の取り組みについての説明を受けた。この問題は慎重に取り組むべき課題であり、12月23日または24日にこの問題を集中して審議するための委員会(勉強会)を東京で開催し、検討を進める。

以上

幹事 久保田知敏 記

### 1 『日本中国学会報』

従前のように担当校が分担して編集します。平成14年度については、全体の編集を京都大学、学界展望の哲学部門は関西大学、文学部門は九州大学、語学部門は東北大学がそれぞれ担当することが決まっています。

学界展望はかつてそうであったように、文献目録のほかに、文章による記述も加えることになりました。とはいえ、今日のように著書・論文の数が増え、専門も分化している状況にあつては、全面的・網羅的に記すことは神ならぬ身には不可能で、担当校責任者の個人的判断による主観的な把握であることは免れません。ただ、担当校が交替することによって、様々な視点からの記述が繰り返されることがなりうると期待しています。

文献目録に関しては、例年行われている「自己申告」をメールでも受け付けることになりました。担当校には調査方法についてのマニュアルを竹村則行委員に作成していただき、それをもとにいつもの充実をはかることになりました。

### 2 『日本中国学会会報』

年2回の発行は以前と同じですが、会員の方により親しんでいただける「会報」を作るべく努めます。有益な情報を得られるのみならず、読みたくなる紙面を目指したいと思います。今回は海外の学会に参加した報告や、各分野で活発に行われている研究会の一部の紹介を若い会員の方に執筆していただきました。

『日本中国学会会報』という名称も、『日本中国学会報』とまぎらわしいので、次回からは新たな名前で再スタートを切ろうと考慮中です。何かいい名前はありますか？

### 3 会員名簿

地区別に分けられているこれまでの名簿は不便なので、ぜひ索引を付してほしいという意見がありました。これもすぐには名案が浮かばず、より使いやすい名簿を目指して考慮中です。

#### ●物故会員リスト

関東地区	内田 道夫	江頭 廣	杉山 太郎
	土井 健司		
近畿地区	市原 亨吉	山口 一郎	
中国四国地区	池田 末利		

#### ●退会者リスト

◇退会申出会員（平成13年8月23日現在）

東北地区	町田 晶		
関東地区	青山 宏	菅原 信海	
	アレアヌ フロレン	徳舛 修	
中部地区	野原 卓郎	藤野 恒男	
中国四国地区	岡田 栄照	高石理恵子	

◇住所不明会員の四年会費未納による退会会員

（平成13年9月13日現在）

北海道地区	渡邊 文隆		
関東地区	奥田美智子	金築 由紀	巖 明
	植田 成記	須貝 美香	董 炳月
	万 清華		
中部地区	栗田 人見		
近畿地区	黄 炫敏		
九州地区	安松治住子	金 点鐘	
国外	蔣 見元	張 才興	

#### ●住所不明会員

北海道地区	濱出 充		
東北地区	野間 晃		
関東地区	井上 泰至	王 小林	翁 玲郷
	熊井 智彦	黒澤 直道	巖 錫仁
	蔣 楽群	曹 峰	滝川ゆう子
	宮本 徹	山村 樹郎	李 明玉
	盧 麗	渡邊 里美	
中部地区	高 芳	小林 誠	佐藤 豊
	柴田 幹夫		
近畿地区	恵良 優子	呉 相武	林 忠鵬
中国四国地区	小川 郁夫		
九州地区	王 展		



# 新入会員一覧

※名前・地区・所属・郵便番号・住所・電話番号の順で記載

大立 智砂子 関東 早稲田大学(院)  
〒162-0041 新宿区早稲田鶴巻町555 クレインビル  
早稲田301  
TEL. 03-3232-2667

岡田 直子 関東 二松学舎大学(院)  
〒166-0015 杉並区成田東4-35-12 ラ・ガーデン  
ア成田東201  
TEL. 03-3314-6240

上原 かおり 関東 大阪外国語大学(院修了)  
〒257-0031 神奈川県秦野市曾屋3561-5 ノバビ  
ュー秦野202  
TEL. 0463-85-3657

加藤 佑季江 関東 國學院大學(院)  
〒213-0013 神奈川県川崎市高津区末長1370-205  
TEL. 044-844-9928

北島 大悟 関東 筑波大学(院)  
〒305-0045 茨城県つくば市梅園2-32-6  
TEL. 0298-58-6387

北村 真由美 関東 早稲田大学(院)  
〒251-0002 藤沢市大鰐3-1-36  
TEL. 0466-22-3289

河野 匡志 関東 二松学舎大学(院)  
〒146-0085 東京都大田区久が原6-3-12  
TEL. 03-3751-1518

齊藤 聡 関東 国士館大学(院)  
〒271-0092 千葉県松戸市松戸638-4  
TEL. 090-1120-4752

佐々木美智子 中部 早稲田大学(院)  
〒188-0013 西東京市向台町1-13-12  
TEL. 0424-63-3464

佐藤 奈津子 関東 二松学舎大学(院)  
〒123-0861 東京都足立区加賀2-3-5  
TEL. 03-3899-7255

高市 裕子 関東 二松学舎大学(院)  
〒359-0037 所沢市くすのき台1-347-5 三上荘  
TEL. 042-996-0048

西村 諭 関東 筑波大学(院)  
〒305-0003 茨城県つくば市桜2-16 チェリーハ  
イツ202号  
TEL. 0298-57-7742

馬場 久佳 関東 東京大学(院)  
〒170-0001 豊島区西巣鴨2-31-7-E112  
TEL. 070-6638-5879

藤澤 太郎 関東 東京大学(院)  
〒270-1114 千葉県我孫子市新木野4-3-5  
TEL. 0471-88-7398

堀川 貴司 関東 国文学研究資料館助教授  
〒236-0021 横浜市金沢区泥亀1-22-5-406  
TEL. 045-782-1287

本田 千恵子 関東 國學院大學専任講師  
〒158-0082 東京都世田谷区等々力7丁目4番15号  
TEL. 03-3704-2034

王 恩琦 九州 九州大学(院)  
〒810-0063 福岡市中央区唐人町1-12-18-701号  
TEL. 092-715-3912

景 献力 九州 九州大学(院)  
〒812-8581 福岡市東区箱崎6丁目19番1号  
九州大学中国文学研究室 気付  
TEL. 092-642-2397

小園 晃司 九州 九州大学(院修了)  
〒862-0938 熊本市長嶺東1丁目2番46号 B棟106  
号室  
TEL. 096-380-3026

陳 秋萍 九州 九州大学(院)  
〒813-0016 福岡県東区香椎浜1-8-7-501  
TEL. 092-683-0136

西田 真理子 九州 九州大学(院)  
〒812-8581 福岡市東区箱崎6丁目19番1号  
九州大学中国文学研究室 気付  
TEL. 092-642-2397

黒田 秀教 近畿 大阪大学(院)  
〒611-0002 宇治市木幡南山54-25  
TEL. 0774-31-5975

坂下 由香里 近畿 関西大学(院)  
〒564-0073 吹田市山手町3-13-8 コート関大前  
C棟215号  
TEL. 06-6385-5969

谷津 康介 近畿 関西大学(院)  
〒565-0851 吹田市千里山西5-3-2 アドレ千里山  
501号  
TEL. 06-6385-8110

山口 円 近畿 京都大学(院)  
〒606-8101 京都市左京区高野藁原町8 栄荘1階  
3号室  
TEL. 090-1429-4168

山田 明広 近畿 関西大学(院)  
〒565-0841 吹田市上山手町18-10 ハイッ大谷Ⅱ  
棟16号  
TEL. 06-4861-0681

王 佑心 中国・四国 広島大学(院)  
〒739-0047 広島島市西条下見5-10-3 苺荘316R  
TEL. 0824-21-9084

高 文軍 中部 桜花学園大学助教授  
〒465-0094 名古屋市中名東区龜ノ井2-151-305

高橋 愛彦 中部 愛知大学(院)  
〒430-0924 静岡県浜松市竜禅寺町1-1-411  
TEL. 053-456-3307

村山 敬三 中部 新潟県立長岡高等学校教諭  
〒945-0855 新潟県柏崎市大学館波1815-38  
TEL. 0257-24-0992

晏 妮 関東 慶応大学(非)  
〒187-0002 小平市花小金井1-4-22-1  
TEL. 0424-68-5801

金川 朋絵 関東 東京学芸大学(院)  
〒187-0043 小平市学園東町1-16-32 栄荘105号  
TEL. 042-348-3101

河井 義樹 関東 大東文化大学(院)  
〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-26-10-102  
TEL. 03-3550-2059

佐々木真理子 関東 文教大学附属高校(非)  
〒184-0012 小金井市中町4-8-12-201  
TEL. 042-388-8798

澤田 久理子 関東 東洋大学(院)  
〒277-0065 千葉県柏市光ヶ丘1-5-6  
TEL. 0471-72-1669

鈴木 信温 関東 桜美林大学(院)  
〒350-1255 埼玉県日高市武蔵台7-7-9  
TEL. 0429-82-3773

田中 紀子 関東 明海大学(院)  
〒135-0016 江東区東陽2-3-6-708  
TEL. 03-3646-0751

山口 経智 関東 二松学舎大学(院)  
〒125-0041 葛飾区東金町1-31-2-402  
TEL. 03-3608-6605

渡辺 志津夫 関東 東京学芸大学(院)  
〒176-0001 練馬区練馬1-36-2  
TEL. 03-3993-6832

伊藤 徳子 近畿 奈良女子大学(院)  
〒630-8253 奈良市内侍原町4 小林ビル402  
TEL. 0742-24-4031

井上 薫 近畿 大阪大学(院)  
〒543-0051 大阪市天王寺区四天王寺1-2-14-1302  
TEL. 06-6773-3833

岩崎 菜子 近畿 立命館大学(非)  
〒520-2152 滋賀県大津市月輪5丁目10-14  
TEL. 077-543-4602

尾崎 勤 近畿 京都大学(院)  
〒603-8246 京都市北区紫野西泉堂町15 サンシャ  
イン細井506  
TEL. 075-495-6828

菅原 慶乃 近畿 大阪大学(院)  
〒560-0041 豊中市清風荘1-16-24-23  
TEL. 06-6853-7271

藤原 祐子 近畿 大阪大学(院)  
〒606-0931 京都市左京区松ヶ崎井出ヶ海道町10  
-1 メゾンコルザ201  
TEL. 075-702-1072

渡邊 登紀 近畿 京都大学(院)  
〒664-0841 兵庫県伊丹市天津字藤ノ木19-8  
TEL. 0727-78-1560

颯川 智 九州 福岡教育大学(院)  
〒819-0025 福岡市西区石丸2丁目32-10  
TEL. 092-881-4495

高 秀華 九州 久留米大学(院)  
〒839-0851 久留米市御井町494  
TEL. 090-9603-5458

古賀 崇雅 九州 久留米大学(院)  
〒810-0066 福岡市中央区福浜2-2-5-105  
TEL. 092-734-0998

陳 菁 九州 久留米大学(院)  
〒815-0082 福岡市南区大楠3-17-31-206  
TEL. 090-1974-6518

横山 健一 九州 九州大学(院)  
〒812-0053 福岡市東区箱崎2-9-16 キャッスル  
マンション箱崎 B号館405号室  
TEL. 070-5650-0457

野田 耕司 九州 熊本学園大学専任講師  
〒862-0956 熊本市水前寺公園28-10-401  
TEL. 096-383-5952

## 日本で開催される 中国語国際会議 (IACL-11) の 御案内とお願い

IACL-11組織委員会委員長  
岩田 礼 (愛知県立大学)

来年、2002年8月20日-22日、愛知県立大学(愛知県愛知郡長久手町)を会場として、中国語の国際会議が開催されることになりました。中国語学の領域では我が国初の本格的な国際会議となります。

スポーツの国際大会は当たり前前のことです。自然科学では国際会議が日本でも頻りに開かれています。ところが、我々の世界ではそれが当たり前前とはなっていません。いろいろな理由があると思います。まず中国研究は外国研究であり、従って我々が中国を訪れ、かの地の研究者を招くことは自明かつ自然であっても、こちらで国際会議を開くべき必然性が感じられないこと。加えて、国内に伝統的な研究体制と近年の中国語学習人口の膨張に支えられた分厚い研究層が存在し、自足的な世界が形成されていること。この点は日本の長所でもあり、批判されるべきではないと思います。しかし近年、海外の会議に出席する日本の研究者が増えるにつれ、一方では日本の研究に対する関心が高まり、また一方では、かように研究・教育の盛んな国がなぜ国際会議を主催しないか、という声も聞かれるようになりました。日本から海外への研究者の流れがその逆より圧倒的に多い、というアンバランスを解消する必要がある、これがこの国際会議を開催するに至った直接の動機です。しかしこの会議は単にノルマを果たすだけのものではなく、

日本の中国語研究はかつて世界的にも先端に位置する業績を生み出しました。有坂秀世、河野六郎、頼惟勤に代表される音韻史研究、太田辰夫に代表される語法史研究などです。『中国語学事典』(1958年、江南書院)や『中国文化叢書1・言語』(1967年、大修館)をみれば、特定の分野に限らず、中国語学全体としての研究の厚みが理解できます。学会(IACL)では、日本での大会開催に合わせて、「橋本萬太郎歴史音韻学賞」の創設が決定されました。この賞は余蘆芹(Anne Yue-Hashimoto)教授のお志と御寄付(今後毎年500米ドル)に基づくものですが、故橋本萬太郎教授の歴大な業績の中で、特に歴史音韻学の分野が選ばれたのは、それを生んだ我が国の学統に対する敬意の表れでもある、と私は考えています。しかしそれで喜んでいては洒落にもなりません。先達に対する評価は、いうまでもなく現在の日本の研究に対する評価とイコールではないからです。“分厚い研究者層”がハイレベルの研究を生むとは限りません。私達は私達の時代の研究を提示する必要があります。また先達の時代とは異なり、日本の大学で教える外国人の先生も確実に増えています。いまや、“日本人の研究”ではなく、国籍を超えて“日本の研究”を構築し、国境を超えて研究交流を進める時代になっていると思います。国際会議は、新世紀における日本の研究の成果と研究のあり方を示す場

ともなるよう願っています。

大会開催には意志と条件の双方が必要です。条件には、資金、施設、運営体制等があります。私達の場合は、意志のみ先行し、条件作りは後回しになりました。資金ゼロ、大学院生ゼロ、アクセスが悪い上に、2005年万博の会場となる公園以外は何もないロケーションでどうやってやればよいか、知恵をしばってききました。

資金については、幸い日本中国語学会会員を中心とする皆様から予想を越える個人寄付が集まっております。語学会会員以外の皆様の中でも、もし私達の志に共鳴して下さる方がおられましたら、御協力をお願いします。連絡先、振込先は下記の通りです。ただ、草の根募金に依存する現状は、主催者として誠に世に詫たるものがあります。せつせと財団助成申請書を書いているところです。

またできるだけ多くの方に会議に参加していただきたいと思っています。特に若手研究者には、論文発表を期待しています。論文はすべて事前の審査によって選ばれます。年々競争が厳しくなっておりますが、腕試しの絶好のチャンスです。なお論文発表への応募資格はIACL会員に限られますが、会議へのオブザーバー参加は参加費(登録費)さえ払えばオープンです。詳しくは下記ホームページをご覧ください。

日本中国学会には、後援を御決定いただき、有難く思っております。どうぞよろしくご支援のほど、お願い申し上げます。

### [連絡先]

〒480-1198 愛知県愛知郡長久手町熊張  
愛知県立大学外国語学部 IACL-11組織委員会  
E-mail: iac11@for.aichi-pu.ac.jp  
Tel. 0561-64-1111 内線2516, 2403;  
Fax. 0561-64-1107

ホームページ <http://www.aichi-pu.ac.jp/for/person/iac11/>

### [寄付金の払い込み方法]

郵便振替: 00860-0-96525 IACL-11組織委員会

\*「募金要項」を上記ホームページに掲載しております。

### [会議の概略]

(1) 名称

国際中国語言語学学会第11届年會(中国語)/The 11th Annual Conference of the International Association of Chinese Linguistics (IACL-11) (英語)

\* The International Association of Chinese Linguistics (IACL) は、中国語言語学の領域で唯一の国際組織(本部はアメリカ・南カリフォルニア大学)。

(2) 過去の開催地・機関(開催順)

シंगाポール国立大学(第1回, 第9回), フランス・東アジア言語研究所/パリ第七大学, 香港城市大学, 米国・ウィスコンシン大学(Madison), 台湾・清華大学, オランダ・ライデン大学, 米国・スタンフォード大学, メルボルン大学, 米国・カリフォルニア大学(Irvine)

(3) 会議の内容

- ①全体集会における講演(Keynote Speech): 6件
- ②分科会における一般発表: 100-120件
- ③特別ワークショップ(テーマ未定)。
- ④「若手研究者賞(Young Scholars Award)」及び「橋本萬



太郎歴史音韻学賞」(Mantaro J. Hashimoto Award) 候補論文の発表会

#### (4) 主なスケジュール

平成14年

2月22日 論文発表(特別賞に応募する場合は、論文全文)の締切

3月 発表要旨・論文査読

4月末 査読結果の通知

6月末 参加登録一次締切

7月末 参加登録最終締切、プログラムの確定

8月20-22日 大会

## 第17回 ISO 国際会議に参加して

研究推進・国際交流委員会委員  
松岡 榮志 (東京学芸大学)

去る6月18日から5日間、香港で開催されたISO(国際標準化機構)の国際会議に日本代表の一人として参加してきました。この会議は、正式にはISO/IEC SC2/WG2/IRGといい、1990年からほぼ半年に一度開かれています。今回は17回目、4年前に中国返還のセレモニーがとりおこなわれたHKCEC(香港会議展覧中心)の6階会議室で、中国、日本、韓国など9カ国、地域の代表45名を集めて開かれました。

今回の主要なテーマは、何とんでも「ISO/IEC 10646-1」に付け加えるExtension-Bの最終案作りです。この「ISO/IEC 10646-1」とは、世界のすべての文字や記号にコード(符号)を振り、コンピュータの中で一元的に処理するための国際規格です。すでに、1993年に最初の規格が発行され、95年には我が国の工業規格「JIS X 0221」として制定、公布されています。(さらに、昨年その改訂版、「ISO/IEC 10646-1:2000」が発行され、本年4月、「JIS X 0221-1:2001」が制定されています)

この「ISO/IEC 10646-1」の中には、20,902の漢字コードが収められています。さらに、改訂版では6,692の漢字コードが追加されました。ここで、20902個の「漢字」と言わないのは、その符号の場所に、中国、台湾、日本、韓国、ベトナムの「漢字」が並べられているからです。実際に数えてみると、実に4万以上の「漢字」が埋め込まれています。我が国の規格で言えば、「JIS X 0208」(第一、第二水準)と「JIS X 0212」(補助漢字)はすべて含まれています。日常生活の上では、十分すぎるほどの漢字が収められていると言ってよいでしょう。

しかし、私たち中国の古典を研究する場合には、もちろんそれでは足りない場合があります。『四庫全書』や『四部叢刊』などの大型の漢籍データベースを作る場合にも、より多くの異体字を必要とします。(ただ、実際には、『四庫全書』でも約3万字で済んでしまったようですが、『大

漢和辞典』や『漢語大字典』などの字書を作るためだけに必要な異体字が山ほどあるのです)そういうかけ声で、拡張(Extension)作業が始まりました。まず、先に挙げた「Extension-A」が何とか終わり、今回の「Extension-B」の作業が何年にもわたって続けられました。そして、今回の42,711の漢字コードが追加されたのです。こうして、理論的には70,205の漢字(コード)を使うことができるようになりました。『大漢和辞典』も『漢語大字典』もすべて収められました。「理論的には」と言いましたのは、実際に使われることは多分ないだろうと思われるからです。(ちなみに、皆さんのPC(パソコン)で「補助漢字」を搭載しているものは、ほとんどありません。)

この「Extension-B」の全容は、まもなく公開されるでしょうが、たしかに多くの問題を含んでいます。各国、地域の代表は、自分の国、地域の声や利益を代表して議論に臨みます。そこでは、議論がしばしば情報処理や文字論の枠を超えて、一種の外交交渉となり、いわば妥協点をどこに見つけるかで一日が終わってしまうこともよくあります。それは、きわめて根気と情熱と忍耐力を要します。ただ、最終案が多くの問題を含んでしまいがちなのは、何よりも日常的に漢字を使わない国々の圧力をもろに受けるからです。ここに、漢字を「国際」規格に収める難しさがあります。ところで、この国際会議は通常英語で行われますが、議論が白熱すると突如中国語のつぼと化します。そして、思い切り議論したあとで、また英語の世界にもどります。漢字を議論するのに中国語を使うのは、わたしたちにとっては当然のことですが、英語しかできない人たちにとっては我慢のならない、耐え難いことのようにです。(ここで誤解しないでいただきたいのは、アメリカの代表もベトナムの代表も中国語を話します。)

さて、次に何と「Extension-C」という話もありますが、もうそろ「ネットバブル」のような話はひとまずおいて、日常必要とする基本的な漢字セットの標準化に取りかからねばなりません。この基本的な漢字セットの構想は、私たちが95年くらいからずっと提唱してきたのですが、「大きいことはいいことだ」の大合唱の中でほとんど見向きもされませんでした。今年になって、ようやく情報処理学会の試行標準として、検討が始まりました。

最後に、ここ数年、日本中国学会からの派遣という形で旅費の一部を援助していただいていることに深く感謝申し上げます。私としては、日本の中国学(文学、哲学、語学)の専門家の利益のみならず、多くの国や地域の人々の利益に広く寄与することを念頭において、活動を行っています。その結果、Bulldog Award(1999)及び「標準化貢献賞」(2001)を受賞しました。

これまでは情報処理委員会報告として、理事会に対して報告を行ってきましたが、今後はいっそう多くのかたに活動を知っていただく機会を多く持ちたいと願っています。なお、活動に興味ある方は、以下のものをお読み下さい。

◎石川・松岡:『漢字とコンピュータ』(1997,大修館書店)

◎松岡榮志:『漢字の危機』は杞憂にすぎない(『中央公論』1998年3月号)

◎『漢字文献情報処理研究』第2号(2001,好文出版)

E-mail:JCF10470@nifty.ne.jp



# 平成13年度 文部科学省研究費補助金採択状況一覽

## 特定領域研究 (A)

- 原本「老子」の形成と林希逸「三子齋口義」に関する研究 260万円  
五味知久 (東京大学人文社会系研究科)
- 仏教における主要概念のインド・中国・日本における伝承と受容 380万円  
丘山 新 (東京大学東洋文化研究所)
- 六朝期の著作における伝統の継承と変容 280万円  
斎藤希史 (国文学研究資料館)
- 中国における制度と古典—科挙制度と言語史・文学史の相関から— 450万円  
平田昌司 (京都大学文学研究科)
- 中国中世の道家・道教典籍の形成 110万円  
堀池信夫 (筑波大学哲学・思想学系)
- 「全明俗曲」の編纂 80万円  
大木 康 (東京大学人文社会系研究科)
- 「動物」の表象—中国と西洋の対峙 140万円  
中島隆博 (東京大学総合文化研究科)
- 日本における唐律令・礼の継受と展 110万円  
大津 透 (東京大学人文社会系研究科)
- 中国恋愛文学の発掘 110万円  
川合康三 (京都大学文学研究科)
- 中国周縁地域における「華化メカニズム」と学術の伝播 130万円  
木津祐子 (京都大学文学研究科)
- 元明代散曲の解釈 140万円  
金 文京 (京都大学人文科学研究所)
- 古代・中世の漢文訓読文資料の文体的研究 80万円  
金水 敏 (大阪大学文学研究科)
- 日中幼学書の比較文化的研究 210万円  
黒田 彰 (佛教大学文学部)
- 抄物の原典参照データベースの構築—「韻府群玉」と「玉塵抄」を例として— 130万円  
出雲朝子 (青山学院女子短期大学)
- ネットワークを利用した双方向型中国語コミュニケーション授業の開発 160万円  
田邊 鉄 (北海道大学)
- 中国近世における小學書出版に関する研究 240万円  
花登正宏 (東北大学文学研究科)
- 明万歴嘉興蔵の出版とその影響 400万円  
中嶋隆藏 (東北大学文学研究科)
- 中国南部の族譜：版本と手鈔本の社会的機能の比較を中心とした研究 230万円  
瀬川昌久 (東北大学)
- 戦国から秦・漢への時代転換と写本の変化 220万円  
浅野裕一 (東北大学国際文化研究科)
- 宋代官僚体制確立における出版の役割 230万円  
熊本 崇 (東北大学文学研究科)
- 中国教派系宝巻の書誌・目録学的研究 270万円  
磯部 彰 (東北大学)
- 中国明清兩王朝による「国史」の編纂と出版のプライオリティ 180万円  
新宮 学 (山形大学人文学部)
- 東アジアにおける漢籍医薬書の出版・流通と相互影響 220万円  
真柳 誠 (茨城大学人文学部)
- 江戸時代における漢籍の流転—佐伯文庫を例に— 400万円  
大塚秀高 (埼玉大学教養学部)
- 朝鮮に伝来した漢訳西学書・天主教書の研究 380万円  
鈴木信昭 (富山大学人文学部)
- 坊刻書を中心とする明刊本書誌の研究 230万円  
井上 進 (名古屋大学文学研究科)
- 「通書」の東アジアの展開 230万円  
三浦国雄 (大阪市立大学文学部)
- 和漢の辞書・類書の書誌的研究 400万円  
関場 武 (慶應義塾大学文学部)
- 「宋版私書、とくに東禅寺版の刷印(補刻)に関する調査研究」 230万円  
牧野和夫 (実践女子大学文学部)
- 明末清初の福建を中心とする坊刻本の出版状況の研究 230万円  
小川陽一 (大東文化大学文学部)
- 「四書集註」の周辺 230万円  
吉田公平 (東洋大学文学部)
- 中国における印譜の成立とその展開 220万円  
高山節也 (二松学舎大学文学部)
- 日本支配下中国・「満州」における出版文化の諸相 230万円
- 岡村敬二 (京都学園大学人間文化学部)
- 「中国近世の知識人社会と出版文化、とくに科挙関係資料と類書を中心に」 230万円  
森田憲司 (奈良大学文学部)
- 中国における才子佳人小説の出版と朝鮮・越南・日本への影響 240万円  
磯部祐子 (高岡短期大学)
- 漢字文化圏における古写本の変遷と初期印刷物に関する調査研究 230万円  
赤尾栄慶 (京都国立博物館)
- 院政・鎌倉時代の寺院社会における宋版辞書類の流通とその影響に関する研究 70万円  
池田証壽 (北海道大学文学研究科)
- 「和漢軍書」出版の思想史的研究—作者・読者・地域社会— 150万円  
若尾政希 (一橋大学社会学研究科)
- 元明時代における法律実用書の基礎的研究 150万円  
徳永洋介 (富山大学人文学部)
- 北宋期における古典校刻の学術史的意義に関する研究 120万円  
古勝隆一 (京都大学人文科学研究所)
- 中華書局と中華人民共和国の古籍整理事業—「二十五史」の校点出版の背景 130万円  
陳 仲奇 (鳥根県立大学総合政策学部)
- 出版分野における近代日中学術交流の研究 140万円  
陳 捷 (日本女子大学人間社会学部)
- 墓葬出土書籍より見た戦国・秦漢の出版文化 100万円  
藤田高夫 (関西大学文学部)
- 「満州国」時代を中心とする「満蒙」関係刊行物の研究 100万円  
原山 煌 (桃山学院大学文学部)
- 紙馬の研究—東アジアにおける宗教的印刷物の発展・流通と神の使者としての馬 70万円  
吉田隆英 (姫路獨協大学外国語学部)

## 基盤研究(A) 新規

- 我国伝統中国学の独自性を発信するためのシステム開発 1340万円  
平勢隆郎 (東京大学)
- アジア・アフリカにおける多言語状況と生

活文化の動態 680万円  
梶 茂樹 (東京外国語大学 AA 研)  
● 中国四川省石窟摩崖造像群に関する記録  
手法の研究及びデジタルアーカイブ構築  
830万円  
肥田路美 (早稲田大学文学部)

### 基盤研究(A) 継続

● 六朝隋唐期社会における宗教文化の役割  
に関する歴史的研究 470万円  
麦谷邦夫 (京都大学人文科学研究所)  
● 17世紀日本における中国・韓国の漢籍受  
容の分析並びに総合的研究 760万円  
富士昭雄 (駒澤大学文学部)  
● 和本及び和刻漢籍に於ける各種伝記資料  
の所在に関する調査研究 860万円  
新藤協三 (国文学研究資料館)  
● 環太平洋圏の華文文学に関する基礎的研究  
820万円  
山田敬三 (福岡大学文学部)

### 基盤研究(B) 新規

● 宋代士大夫の相互性と日常空間に関する  
思想文化的研究 140万円  
小島 毅 (東京大学人文社会系研究科)  
● 「大乘起信論」と法蔵教学の実証的研究  
820万円  
井上克人 (関西大学文学部)  
● 植民地期中国東北地域における宗教の総  
合的研究 450万円  
木場明志 (大谷大学文学部)  
● 中国法政文献の日本への伝史とその伝存  
状況に関する基礎的研究 520万円  
坂上康俊 (九州大学人文科学研究科)  
● 中央アジア出土文物から見たシルクロード  
貿易と文化交流の諸相 620万円  
森安孝夫 (大阪大学文学研究科)  
● 日本漢字音データベース(大学音表)作成  
のための基礎的研究 660万円  
湯沢賢幸 (筑波大学文芸・言語学系)  
● 清元節の基礎的研究 360万円  
安田文吉 (南山大学文学部)  
● 中国語普通話文法と方言文法の多様性と  
普遍性に関する類型論的・認知言語的研究  
600万円  
杉村博文 (大阪外国語大学外国語学部)  
● 歴史文献データと野外調査データの総合を  
目指した漢語方言史研究 320万円  
太田 斎 (神戸市外国語大学外国語学部)  
● 現代香港広東語の語彙体系とその形成に  
関する記述的研究 510万円

千島英一 麗澤大学外国語学部  
● 近代中国東北部(旧満州)文化に関する総  
合研究 420万円  
劉 建輝 (国際日本文化研究センター)

### 基盤研究(B) 継続

● 郭店出土竹簡及びそれと関連する出土資料  
の研究—中国古代思想史の再構築を目指して—  
210万円  
谷中信一 (日本女子大学文学部)  
● 祖靈祭祀の日中比較研究 200万円  
野坂幸弘 (岩手大学教育学部)  
● 戦国楚系文字資料の研究 130万円  
竹田健二 (高根大学教育学部)  
● 道教的密教的辟邪呪物の調査・研究  
390万円  
坂出祥伸 (関西大学文学部)  
● 元代禅籍の語学的研究—「從容録」を中心  
として— 130万円  
佐藤鍊太郎 (北海道大学文学研究科)  
● 宋代禅宗が社会に与えた多面的影響の研究  
140万円  
鈴木哲雄 (愛知学院大学文学部)  
● 春秋戦国時代銅器の研究 220万円  
高浜 秀 (東京国立博物館)  
● 中国における文化批判運動に関する総合  
的研究 200万円  
小谷一郎 (埼玉大学教養学部)  
● 中国学に関する南欧所存資料の研究  
250万円  
高田時雄 (京都大学人文科学研究所)  
● 琉球・中国交流史研究 220万円  
上里賢一 (琉球大学法文学部)  
● 中国語雲南省・四川省藏族における工芸と  
芸能の記録保存と文化伝承をめぐる国際共  
同研究 290万円  
服部等作 (広島市立大学芸術学部)  
● 骨と位牌—東アジア周縁社会における先祖  
祭祀の象徴に関する比較民俗学の研究—  
360万円  
古家信平 (筑波大学歴史・人類学系)  
● 中国福建省福州及び泉州と沖縄の文化・  
社会の比較研究 460万円  
小熊 誠 (沖縄国際大学文学部)  
● 中国女文学の実態調査 170万円  
遠藤織枝 (文教大学文学部)  
● 唐宋道教の心性思想研究 140万円  
山田 俊 (熊本県立大学文学部)

### 基盤研究(C) 新規

● 先秦儒家思想における性命観と存在概念  
について 90万円  
瀬尾邦雄 (鶴岡工業高等専門学校)  
● 白隠直筆「法華経細註」の研究 170万円  
堀内伸二 ((財)東方研究会)  
● 東アジアにおける儒教思想の倫理思想史  
的研究—「人倫」概念を手がかりに—  
70万円  
高島元洋 (お茶の水女子大学教育学部)  
● 近世後期幕府儒者の思想史的位置に関す  
る研究 70万円  
中村安宏 (岩手大学人文社会科学部)  
● 考古出土物と祭祀儀礼・芸能よりみる中国  
基層文化の研究 110万円  
稲畑耕一郎 (早稲田大学文学部)  
● 中国西南地域諸民族誌の基礎研究—主  
に雲南省を中心に— 60万円  
栗原 悟 (相模女子大学芸学部)  
● 日本古代漢籍受容史の研究 60万円  
榎本淳一 (工学院大学工学部)  
● 「入唐求法巡礼行記」に関する文献校定お  
よび基礎的研究 150万円  
鈴木靖民 (國學院大学文学部)  
● 近代中国の宗教運動と海外華人社会  
120万円  
森 紀子 (神戸大学文学部)  
● 中国明清時代の民間宗教と文化・社会構造  
80万円  
浅井 紀 (東海大学文学部)  
● 日中戦争期における上海に関する総合的  
研究 90万円  
高綱博文 (日本大学)  
● 唐話辞書の発展・系統史の研究—唐通  
事・異国通詞諸家の翻訳語彙の検討—  
110万円  
若木太一 (長崎大学環境科学部)  
● 上代文学に与えた六朝文学・仏典の影響  
についての考察 80万円  
瀬間正之 (上智大学文学部)  
● 中国魏晋南北朝の修辭文学における形似  
表現と玄学表現の分析及び相互関連に関す  
る研究 150万円  
佐竹保子 (東北大学文学研究科)  
● 毛沢東様式に関する総合的研究 100万円  
牧 陽一 (埼玉大学教養学部)  
● 中国語の「構文」カテゴリと事態認識に関す  
る研究 150万円  
木村英樹 (東京大学人文社会系研究科)  
● 中国領南地域の摩崖石刻の資料化とそれ  
に拠る中国山水文学の実証的研究 250万円  
戸崎哲彦 (滋賀大学経済学部)  
● 南宋・金・元代文学の総合的研究 120万円  
金 文京 (京都大学人文科学研究所)



- 琉球を臨界面とする「境界性中国語」の形成について 160万円  
木津祐子 (京都大学文学研究科)
- 包拯伝説の民衆への浸透に関する研究 90万円  
阿部泰記 (山口大学人文学部)
- 呉語処衢方言群祖語の再構 100万円  
秋谷裕幸 (愛媛大学法文学部)
- 漢語諸方言における語声調の実験音声学的研究 130万円  
岩田 礼 (愛知県立大学外国語学部)
- 元代音研究 90万円  
遠藤光暁 (青山学院大学経済学部)
- 中国「早期話劇」における日本演劇の影響 60万円  
飯塚 容 (中央大学文学部)
- 清末・民国初期の巷間資料による庶民文化流通形態の研究 190万円  
岡崎由美 (早稲田大学文学部)
- 中国古典にみる「語られた女」とその文学位相 60万円  
寛久美子 (奈良大学文学部)
- 苗語と周辺諸言語の言語地理学的研究 100万円  
田口善久 (千葉大学文学部)
- 日本語と中国語のとりたて表現の数量的側面に関する認知的対照研究 140万円  
定延利之 (神戸大学国際文化学部)
- 中期蒙古語における外来的要素が言語構造に及ぼした影響の研究 120万円  
樋口康一 (愛媛大学法文学部)
- 契丹文字と女真文字の歴史言語学的研究 90万円  
吉本智慧子 (立命館アジア太平洋大学)
- インターネットを活用した中国語学習支援システムの開発とより一層の実用化 150万円  
ピラールイリアス (立命館大学経済学部)
- 中国近代における身体についての思想文化のジェンダー論による分析 150万円  
坂元ひろ子 (一橋大学社会学研究科)
- ジェンダーからみた中国の「家」と「女」 140万円  
野村鮎子 (奈良女子大学文学部)
- 中国語研究の新潮流と人文諸科学 350万円  
平田昌司 (京都大学文学研究科)

### 基盤研究(C) 継続

- 南宋中期における士大夫思想交流の基礎的研究 50万円  
市来津由彦 (広島大学文学部)
- 唐代儒道仏三教交渉史上における宗密

- 教学の研究 40万円  
中西啓子 (新潟大学人文学部)
- 春秋正義の発展的研究 100万円  
野間文史 (広島大学文学部)
- 朱熹「家礼」の版本と思想に関する実証的研究 50万円  
吾妻重二 (関西大学文学部)
- 日本近世における老荘思想の解釈に関する研究 110万円  
大野 出 (愛知県立大学文学部)
- 敦煌写本の書誌に関する調査研究—三井文庫所蔵本を中心として— 90万円  
赤尾栄慶 (京都国立博物館)
- 石刻史料による元代漢人知識人社会の研究 30万円  
森田憲司 (奈良大学文学部)
- 唐宋変革期における女性・婚姻・家族の研究 80万円  
大澤正昭 (上智大学文学部)
- 清代清文書の研究 120万円  
加藤直人 (日本大学文理学部)
- 古代日本文学における漢語の受容 90万円  
山崎健司 (奥羽大学文学部)
- 漢字圏の文字の字形集合に関する情報理論的研究 60万円  
鹿島英一 (九州大学)
- 唐宋期の詩と詩学に関するメディア論的研究 70万円  
浅見洋二 (大阪大学文学研究科)
- 中国古小説の類話集成に関する研究 100万円  
富永一登 (広島大学文学部)
- 六朝詩語の研究 80万円  
佐藤利行 (広島大学文学部)
- 石印版小説と近代小説形成の関係 10万円  
丸山浩明 (広島女子大学国際文化学部)
- 『日本国見在書目録』著録書及び著録書の著者に関する研究 70万円  
孫 孟 (早稲田大学法学部)
- 漢魏晉南北朝詩「詩語」集成 50万円  
松浦 崇 (福岡大学人文学部)
- 中国話者への理解語彙と使用語彙に関する研究 70万円  
山田眞一 (高岡短期大学)
- 俗文学資料による中国近世音の研究 150万円  
花登正宏 (東北大学文学研究科)
- 中国における家族に関する文学表象の展開についての基礎的研究 70万円  
西上 勝 (山形大学人文学部)

- 「生活の芸術」の系譜と近代中国知識人の位置 50万円  
伊藤徳也 (東京大学総合文化研究科)
- 漢字文化圏の言語と「近代」に関する総合的研究 80万円  
刈間文俊 (東京大学総合文化研究科)
- 「香港文学」の誕生と香港アイデンティティの成熟に関する研究 110万円  
藤井省三 (東京大学人文社会科学系研究科)
- 漢字書研究の基礎としての『説文解字』受容史研究 50万円  
伊藤美重子 (お茶の水女子大学文教育学部)
- 民国期中国の昔話研究に関する総合的研究 110万円  
橋谷英子 (新潟大学人文学部)
- 敦煌文書・トルファン文書・正倉院文書の比較写本学研究 70万円  
松尾良樹 (奈良女子大学文学部)
- 文学創作の発想法に基づく中国現代文学史の研究 70万円  
岩佐昌暲 (九州大学言語文化研究科(研究院))
- 唐代音楽の文献的研究 50万円  
齋藤 茂 (大阪市立大学文学部)
- 「古小説鈎沈」本文研究 80万円  
中嶋長文 (神戸市外国語大学外国語学部)
- 李白の文一記・銘・讚の訳注考証 130万円  
市川桃子 (明海大学外国語学部)
- 清朝における唐詩研究 60万円  
赤井益久 (國學院大学文学部)
- 中国帰国者の言語使用調査研究(日本語習得と中国語維持をめぐる言語教育の資料作成) 60万円  
友沢昭江 (桃山学院大学文学部)
- 日本語・中国語・韓国語の外來語音韻データベース構築と音韻構造の定量的対照研究 80万円  
SANDERS ROBERT, M (東北大学)
- 韓国高麗時代における詠物詩「花木」を中心として一韓中比較の観点から— 160万円  
朴 美子 (熊本大学文学部)

### 萌芽的研究 新規

- 明代科挙の思想史的研究 130万円  
鶴成久章 (福岡教育大学教育学部)
- 中国における毛沢東カルトに関する文化人類学的研究 70万円  
韓 敏 (国立民俗学博物館)
- 彙音妙悟の分析と校訂 100万円  
樋口 靖 (東京外国語大学外国語学部)
- 中国文学における古典文学と児童文学



の交渉 50万円  
彭佳紅 (帝塚山学院大学文学部)

### 萌芽的研究 継続

- 中国文化構造における「天」と「人」の関わりについての原理論的研究 100万円  
関口順 (埼玉大学教養学部)
- 初期朝鮮朱子学に関する研究 50万円  
佐藤貢悦 (筑波大学哲学・思想学系)
- 戦国楚系文字資料による漢語史再構のための予備的研究 50万円  
大西克也 (東京大学人社会系研究科)
- 認識構造理論による「アイロニー関連語彙」の関係性とその日・英・中・韓国語比較 60万円  
河上誓作 (大阪大学文学研究科)
- 中国・台湾における三島由紀夫文学の受容 70万円  
テングト艾特 (北海学園大学人文学部)

### 奨励研究(A) 新規

- 東アジアの中での日本の世界イメージの形成と展開に関する研究 140万円  
鷹巣純 (愛知教育大学教育学部)
- 北宋時代を中心とした中国仏教絵画の研究 110万円  
大原嘉豊 (京大文学部)
- 近世中期漢学者・文人の学芸と文学 90万円  
田中則雄 (島根大学法文学部)
- 宋元時代における「三國志伝説」の、「三國志平話」成立に与えた影響についての研究 120万円  
中川論 (新潟大学教育人間科学部)
- 現代中国語移動表現についての研究: 言語使用者の認識との関連において 50万円  
丸尾誠 (名古屋大学)
- 抗戦期以降に中国における女性作家研究—張愛玲を中心に— 120万円  
濱田麻矢 (神戸大学文学部)
- 清末民初・文言小説の文体に関する研究 70万円  
中里見敬 (九州大学言語文化研究科(研究院))
- 近世における漢語学習の容態—琉球官話と唐話の比較研究 110万円  
石崎博志 (琉球大学法文学部)
- 『厦英大辞典』に見られる閩南語下位方言の分析 100万円  
村上上之伸 (流通経済大学経済学部)
- 『西崑酬唱集』の研究—銭惟演を中心に— 40万円  
池澤滋子 (中央大学商学部)

● 第二次世界大戦以前の香港における言語接触と言語構築 130万円  
吉川雅之 (東京大学総合文化研究科)

### 奨励研究(A) 継続

- 周末漢初における「格言集」の形成と展開—新出土史料より見た— 70万円  
井上了 (大阪大学文学研究科)
  - 清末「啓蒙」思想の基礎的研究—19世紀後半の改革論を中心に— 30万円  
川尻文彦 (帝塚山学院大学文学部)
  - 元代朱子学の基礎的研究—その宋・明哲学の媒介者としての役割について— 80万円  
神林裕子 (甲子園短期大学)
  - 中日禅思想に関する比較研究—道元を中心に— 80万円  
何燕生 (郡山女子大学短期大学部)
  - 中国古代中世の皇帝親属に関する研究 80万円  
下倉涉 (東北学院大学文学部)
  - 中国人社会における中医薬の展開に関する史的的研究 80万円  
帆刈浩之 (川村学園女子大学文学部)
  - 中国古代・中世の皇帝位継承と国家儀礼—儀礼システムと「王朝国家」— 80万円  
松浦千春 (一関工業高等専門学校)
  - 五四時期・北京の文学結社に関する基礎的研究—メディア社会文化史の視点から— 80万円  
清水賢一郎 (北海道大学)
  - 中国唐代初期小説の研究—その小説史的位置の見直しとそれにもとづく作品論の試み— 90万円  
小川良恵 (東京大学人社会系研究科)
  - 近現代日中知識人社会交流に関する基礎的研究 70万円  
星野幸代 (名古屋大学)
  - 京劇演目のデータベース化 60万円  
加藤徹 (広島大学総合科学部)
  - 台湾「皇民文学」の基礎的研究 70万円  
星名宏修 (琉球大学法文学部)
  - 明治前期における日中文化交流の研究—清国公使館の文化活動を中心に— 70万円  
陳捷 (日本女子大学人間社会学部)
- ### 奨励研究(B)
- 曹丕の文学について—建安風骨の考察— 18万円  
上野裕人 (神奈川県立弥栄西高教員)
  - 揚雄の人と文学—漢代知識人の葛藤— 19万円  
本田千恵子 (國學院大学非常勤)

### 研究成果公開促進費

- 朱熹門人集団形成の研究 創文社  
市来津由彦 (広島大学文学部)
- 史通外篇 東海大学出版会  
西脇常記 (京都大学総合人間学部)
- 中国哲学とヨーロッパの哲学者 明治書院  
堀池信夫 (筑波大学哲学・思想系)
- 現代東南中国の漢族社会—南農村の宗族組織とその変容— 風響社  
潘宏立 (平安女学院大学現代文科学部)
- 王朝漢文学表現論考 和泉書院  
本間洋一 (同志社女子大学文学芸学部)
- 中国古典演劇研究 汲古書院  
小松謙 (京都府立大学文学部)
- 西晉文学論 汲古書院  
佐竹保子 (東北大学大学院文学研究科)
- 中国女文学研究 明治書院  
遠藤織枝 (文教大学文学部)
- 「万葉集」恋歌と「詩経」情詩の比較研究 汲古書院  
徐送迎 (新潟大学人文学部外国人非常勤)
- 初期中国語文法学史研究—来華欧人キリスト教宣教師の著述を中心として— 汲水社  
何群雄 (一橋大学大学院社会学研究科)
- 中国の文学史観 創文社  
川合康三 (京都大学大学院文学研究科)
- 人文科学研究所所蔵中国画像史料データベース(CPM)  
代表 井波陵一 (京都大学人文科学研究所画像史料研究会)
- 中国語文献の書誌情報及び画像データベース(BVDC)  
委員長 是永駿 (中国語文献データベース作成委員会)
- 東洋文化研究所所蔵漢籍目録データベース(C.C.C.)  
代表 丘山新 (漢籍目録データベース作成グループ)
- 中国近現代文学関係雑誌記事データベース(DJAMCL)  
代表 尾崎文昭 (中国近現代文学関係雑誌記事DB作成WG)
- 中国語音声教育データベース(EDCP)  
代表 湯山トミ子 (中国語音声教育データベース作成委員会)

# 日本中国学会 平成12年(2000年)度収支決算書

	科 目	予 算	決 算	摘 要
収 入 の 部	1. 前年度繰越	4,075,013	4,075,013	-
	2. 会員会費	12,650,000	12,166,000	-484,000
	3. 文部省刊行助成金	0	0	0
	4. 寄付金	1,000,000	1,021,075	21,075
	5. 預金利息	1,500	2,291	791
	6. 著作権料分配金	0	0	0
	合 計	17,726,513	17,264,379	-462,134

	科 目	予 算	決 算	摘 要
支 出 の 部	1. 総 務 費	1,980,000	1,800,588	179,412
	(1) 印刷費	400,000	250,165	149,835
	(2) 通信費	800,000	777,460	22,540
	(3) 交通費	80,000	66,710	13,290
	(4) 消耗品費	120,000	125,498	-5,498
	(5) 庶務処理費	200,000	200,000	0
	(6) 雑費	200,000	200,755	-750
	(7) 業務委託料	180,000	180,000	振込手数料を含む 斯文会 0
	2. 人 件 費	1,920,000	1,789,000	131,000
	(1) 幹事手当	1,170,000	1,170,000	30,000/月 + 慰労金 0
	(2) 謝金	750,000	619,000	131,000
	3. 会 議 費	1,700,000	1,939,416	-239,416
	(1) 会議費	500,000	507,456	-7,456
	(2) 役員旅費	1,200,000	1,431,960	-231,960
	4. 事 業 費	6,250,000	6,205,088	44,912
	(1) 学会報等刊行費	5,150,000	5,105,088	44,912
	イ 印刷費	3,600,000	3,618,300	-18,300
	ロ 編集費	1,000,000	1,000,000	編集校400,000 学界展望各200,000 0
	ハ 翻訳謝金	150,000	150,000	0
	ニ 発送費	400,000	336,788	63,212
	(2) 学術大会運営費	900,000	900,000	0
	(3) 委員会等運営費	200,000	200,000	情報処理・新会則準備委員会 0
5. 予 備 費	5,876,513	-	11,734,092	
6. 次年度繰越金	-	5,530,287		
合 計	17,726,513	17,264,379		



## 学会基金

	基本金	4,300,000		基本金	4,300,000			
収 入 の 部	前年度繰越金	1,052,134	支 出 の 部	日本中国学会賞	80,000	備 考	奥野基金	500,000
	普通預金利息	4,803		次年度繰越金	983,337		佐藤基金	200,000
	信託収益金	6,400					池田基金	300,000
	合 計	1,063,337		合 計	1,063,337		伊藤基金	300,000
							積立基金	3,000,000

上記の通り、相違ないことを認めます。

平成13年4月15日

日本中国学会監事

大上正美   
堀池信夫 

# 日本中国学会 平成13年(2001年)度収支予算案

収入の部	科目	予算	前年度決算
	1. 前年度繰越	5,530,287	4,075,013
	2. 会員会費	12,650,000	12,166,000
	3. 寄付金	1,000,000	1,021,075
	4. 預金利息	2,200	2,291
	5. 著作権料分配金	0	0
	合計	19,182,487	17,264,379

支出の部	科目	予算	前年度決算
	1. 事務局総務費	1,980,000	1,800,588
	(1) 印刷費	400,000	250,165
	(2) 通信費	800,000	777,460
	(3) 交通費	50,000	66,710
	(4) 消耗品費	120,000	125,498
	(5) 庶務処理費	200,000	200,000
	(6) 雑費	200,000	200,750
	(7) 業務委託料	210,000	180,000
	2. 事務局人件費	1,870,000	1,789,000
	(1) 幹事手当	1,170,000	1,170,000
	(2) 謝金	700,000	619,000
	3. 事務局会議費	900,000	1,939,416
	(1) 幹事手当	300,000	507,456
	(2) 謝金	600,000	1,431,960
	4. 事業費	6,970,000	6,205,088
	(1) 学会報等刊行費	5,470,000	5,105,088
	イ 印刷費	3,620,000	3,618,300
	ロ 編集費	1,300,000	1,000,000
	ハ 翻訳謝金	150,000	150,000
	ニ 発送費	400,000	336,788
	(2) 学術大会運営費	1,200,000	900,000
	(3) マルチメディア事業	300,000	—

支出の部	科目	予算	前年度決算
	5. 各種委員会運営費	1,870,000	200,000
	(1) 大会委員会	300,000	—
	イ 通信費	10,000	—
	ロ 会議・旅費	250,000	—
	ハ 謝金	30,000	—
	ニ 消耗品・雑費	10,000	—
	(2) 論文審査委員会	540,000	—
	イ 通信費	250,000	—
	ロ 会議・旅費	250,000	—
	ハ 謝金	30,000	—
	ニ 消耗品・雑費	10,000	—
	(3) 出版委員会	350,000	—
	イ 通信費	10,000	—
	ロ 会議・旅費	250,000	—
	ハ 謝金	30,000	—
	ニ 会報編集費	50,000	—
	ホ 消耗品・雑費	10,000	—
	(4) 選挙管理委員会	80,000	—
	イ 通信費	10,000	—
	ロ 会議・旅費	30,000	—
	ハ 謝金	30,000	—
	ニ 消耗品・雑費	10,000	—
	(5) 研究推進・国際交流委員会	300,000	—
	イ 通信費	10,000	—
	ロ 会議・旅費	250,000	—
	ハ 謝金	30,000	—
	ニ 消耗品・雑費	10,000	—
	(6) 将来計画特別委員会	300,000	—
	イ 通信費	10,000	—
	ロ 会議・旅費	250,000	—
	ハ 謝金	30,000	—
	ニ 消耗品・雑費	10,000	—
	5. 予備費	5,592,487	—
	6. 次年度繰越金	—	5,530,287
	合計	19,182,487	17,264,379

## 学会基金

収入の部	基本金	4,300,000	支出の部	基本金	4,300,000	備考
	前年度繰越金	983,337		日本中国学会賞	160,000	奥野基金 500,000
	普通預金利息	4,800		次年度繰越金	834,537	佐藤基金 200,000
	信託収益金	6,400				池田基金 300,000
						伊藤基金 300,000
	合計	994,537		合計	994,537	積立基金 3,000,000



## 「日本中國學會報」論文執筆要領

日本中國學會

## 應募資格

1. 日本中國學會會員に限る。

## 使用言語等

2. 應募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。  
ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

## 原稿枚数等

3. 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
4. 原稿枚数は、本文・注・圖版等をあわせて、400字詰原稿用紙55枚以内（厳守）とする。注も原稿用紙1マスに1字を納める。ワープロ使用の場合は1行20字とし、毎ページ何行かを見易い場所に明記する。
5. 圖版を必要とする場合、占有面積半ページ分を400字詰原稿用紙2枚の割合で換算する。圖版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

## 体裁・表記等

6. 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、論文審査委員会の議を経て、横書きを認めることがある。
7. 引用文は内容に応じて原文、譯文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する譯文または書き下し文を、譯文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示すること。ただし、一讀して疑問の生ずる餘地がないものについては、省略することを認める。中國語以外の外國語の引用もこれに準ずる。  
校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。  
原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢學・日本漢文等に関する内容のもので、調点の施し方自體を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負擔とすることがある。
8. 原稿は正漢字體・常用漢字體のいずれの使用も可とするが、印刷にあたっては全文を正漢字體（舊字）に統一する。  
活字は本文9ボ、括弧内は8ボを、注はすべて8ボを使用する。  
特に本文括弧内を9ボにする場合および内容上特に異體字であることが必要な場合は、當該箇所に明記すること。

9. 注は、各章・節ごとに付けず、通し番號を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いないこと。
10. 中國語のローマ字表記は、執筆者の選擇にゆだねるが、同一論文にあっては、ウェード式・漢語？音方案等何らかの統一のあることが望ましい。ただし、特殊な綴りで通用している固有名詞（例 孫逸仙 Sun Yat-sen）、本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。  
日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

## 論文要旨

11. 應募時の原稿には400字5枚以内の論文要旨を添付する。
12. 掲載決定の論文については、英文タイトル及び英語または中國語による論文要旨（英語の場合タイプライター用箋・ダブルスペース2枚以内、中國語の場合800字以内）の提出を求める。要旨には譯文を添えること。

## 原稿提出

13. 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月20日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。  
〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文會館内 日本中國學會
14. 應募の際、審査を希望する部門（哲學・思想または文學・語學）の別を原稿第1ページに朱書すること。ただし、論文の内容により、兩部門にわたる審査を希望することができる。
15. 應募時には、本文・要旨とも複写コピーを用意し、計4部を提出する。（事故に備え、提出前にあらかじめ自家用のコピーをも作成しておくことが望ましい。）又、原稿は原則として返却しない。

## 校正

16. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ認める。加筆・訂正の結果加算された印刷費は、執筆者の負擔とすることがある。

## 抜刷

17. 掲載論文の執筆者に対しては、抜刷30部を贈呈する、抜刷の追加を希望する場合は、初校返送時に追加所要部数を連絡のこと。その分については、實費及び増加送料を本人負擔とする。

（昭和62年10月11日制定）  
（平成13年5月13日修正）